

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	子ども食堂のこれからを考える				
リーダー	安武（グロー）				
進行補助	本間 （栗東市社協）	記録	浅香 （県社協）	参加者数	21名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立ち上げて無我夢中でやってきたこれまでが第1ステージ、これからは大切なキーワードを生かし、企業や関係機関と連携しながら、それぞれの子ども食堂の特徴を出しながら進めていくことが第2ステージである。 					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題がある（貧困の）子どもたちが行くところというイメージがあることで、行きづらくなっているのではないか ・必要な人へ情報が届いていないのではないか（情報を得やすい環境にあるかどうか） ・周囲の目が気になって行きにくい子どもたちへの配慮 ・どのように継続していくのか（継続のコツ） ・立ち上げ当初のスタッフと新たに入ったスタッフの温度差 ・大学生、高校生のボランティアをどのように広げていくか ・地域の中の事情を抱えた子の情報をどう得るか ・高齢者サロン、親子サロン、寺子屋など事業が個々に縦割りであったが、子ども食堂という食を中心にした居場所によって事業間が繋がった ・多世代がほっとできる居場所としての地域食堂となっている 					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者施設の入居者のなかには元教師や裁縫が得意な方々がいて、子どもたちと触れ合うことは、やりがいや生きがいでもある ・学童保育所との連携 ・保育園、認定こども園においても、事業展開していけないのではないか ・中小企業家同友会や、淡海フィランソロピーネットなどとのタイアップ ・子ども食堂の横のつながりができる企画 ・市町社協との連携 ・製造業や小売業等の企業とのタイアップ ・応援したいと思っている方々や企業、団体との交流の場 ・地元の学校が農園等と連携した地産地消 					

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	高齢者施設を活用した子どもの居場所「フリースペース」を深掘り				
リーダー	日比（カーサ月の輪）				
進行補助	加納（県社協）	記録	文野（県社協）	参加者数	18名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この活動の目的は、子どもや家庭の孤立を防ぐこと。子どもだけでなく、家庭の支援をしていかなないと根本的な解決は難しい。 ・大変なこともいっぱいあるが、楽しいこと、こちらが元気になれることもいっぱいある。そこを伝えていきたい。 ・昨年末に12か所目が動き出したが、その後が続いていかない。 ・社協としてこれまで施設とつながりがなかったので、どのようにつながっていけばよいのか？ ・高島市のように、行政や市社協と連携できているところもあるが、市社協とは連携できても行政と“一緒（共に）につくる”という状況にならない。 ・施設として「フリースペースに取り組んでみたい」という声に我がこととして考えてくれる職員はいるが、子どもとのつながり方がわからない。 ・滋賀の縁創造実践センターもフリースペースも活動そのものが知られていない。 ・フリースペース実施施設はどのような支援を求めているのか。お金なのか物なのか。支援したいと思う側もまずは活動そのものを知る必要がある。 ・子ども食堂は開設準備の講座などあるが、フリースペースはできないのか。 ・不登校の子だけでなく、学校に来ている子も苦しさ、しんどさを抱えている。 <p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知事言葉「一緒にやりましょう！」が大変うれしかった。行政にも「一緒に」という感覚を持っていただけると私たちも大変心強い。 ・今まで行政の方と話をする機会もあったが、すぐに「費用対効果」「予算が無い」という言葉が出てくる。 ・子ども食堂と違い、本人・家庭の積極的な意思のないところにこちらからアプローチを仕掛けていく活動の難しさ。子どもを施設につなぐ役割が必要。 ・フリースペースの卒業をどうとらえるか。家庭のことも含めて、コーディネーター役が必要。ここを行政に担ってもらえれば。施設でできることは限られている。 ・不登校という課題もあるが、フリースペースにも学校にもつながっていない子がいる。つながるまでの支援をどうしていくのか。 ・受け入れられる人数に限りがある。施設数、ボランティア確保、職員の配置…。だからこそ数を増やしていかないといけない。 ・この事業が職員のモチベーションアップにつながっている。施設を選ぶ決め手になった職員もいる。 ・かかわる職員、ボランティアが無理をしない。負担にならないように、続けていく。 ・フリースペースとして施設でお風呂に入ることでの気づきはいっぱいあるが、そこが負担になるのであれば無理をしない。できる範囲で継続することが大切。 					

3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）

- ・子ども食堂を小学校区に1か所、フリースペースを中学校区に1か所。まずは各市町に1か所。
- ・興味を持ってきている施設により具体的にアプローチしていく。県社協が窓口となり、フリースペース実施施設が見学や相談を受ける。「フリースペース推進委員会」がバックアップ。
- ・市社協の協力が得られないところについては、県社協がその役割を担う。
- ・フリースペースガイドブックの活用。応援したいと思ったださる企業さんに対して、社内や取引先にも宣伝してもらう。
- ・行政や学校へのアプローチとしては、地域の実情やツテをリサーチして校長先生や要職についている人とつながっていきそうな自治会長や人脈豊富な民生委員・児童委員を探し、理解してもらう。
- ・興味を持ったださった参加者には、「フリースペース交流会」にも声をかける。
- ・フリースペース活動以外で、子どもの居場所づくりをされている方々とも引き続き情報交換、連携をしていく。
- ・社協側として、現状、施設とのつながりがあまりないのであれば、まずはサロン活動などすでになんらかの地域貢献活動をされているところに相談してみる。
- ・興味を持っている（必要性を感じている）民生委員・児童委員と、施設や社協と一緒に顔を合わせる機会をつくる。

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	高齢者施設を活用した中高年障害者の居場所づくりをプランニング				
リーダー	石澤（ステップアップ21）				
進行補助	杉江（県社協）	記録	林（県社協）	参加者数	10名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害のある方の高齢化を受け、地域にどのような居場所ができるといいか。 					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（障害者施設）土曜日に生活介護を開設しているが、毎回40人ほど参加する。ほかに地域の社会資源がなく、障害のある方が行く場所がない。 ・居場所、趣味がない人が多い。障害のある方に趣味が何かを聞くと散歩や就労したお金でお菓子をコンビニで買う、などはされているが。 ・精神障害の方には、住まいの確保の課題もある。 ・介護保険や障害の制度から入るとそれぞれ歴史があり制度の壁がある。その人ならではの暮らし、支援策を考えると制度を超えて見えてくるものがあるのではないか。 ・（高齢者施設）社会福祉法人として高齢者分野だけでなくだれでも相談に来てもらえるようにしたい。地域に開かれた施設にしたい。 ・（高齢者施設）在宅のケアマネをしても障害のある方が地域のどこにいるか見えない。 ・地域の中で今日のように高齢、障害の分野を超えて話をする場所がない。 					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者施設の中で地域の方がリハビリに来られる介護予防の場をつくっている。そこに障害のある方も来てもらえるといい。そこでボランティアとして役割をもって活動してもらえる場にもなるといい。 ・高齢者、障害者それぞれの分野で話をすることはあっても、他の分野と集まる機会がない。地域で今日のような場を持てるようにしたい。 ・高齢者施設で高齢者食堂を実施している。介護予防を兼ねて高齢者の方が来られているが、そこに障害のある方も参加してもらえないか。 ・障害のある方しか行けない場所ではなく、いろんな人が集える場所をつくっていけるといい。地域の商店街にカフェを作り、障害のある方の就労や作品展示の場に。地域の集会所としても活用し、地域のイベントに当事者も参加できるような場がつかれないか。 ・地域のおせっかいをしてくれる人のリストをつくり、地域に障害のある方がつながるきっかけにできるといい。 ・高齢化を知らない小学生がいる。障害のある子も支援学級で区別されてしまう。教育の場で共生社会を考えられないか。知らないから遠慮が生まれる。知ると配慮につながる。 ・障害や病気で分けせずその人自身のことを知り合える機会を。そのために地域で集まれる場が必要ではないか。知るところから始まる。 <p>⇒まずは、今日のように高齢、障害の分野を超えて集まれる場、地域版の縁をつくり、お互いに知り合う機会をつくれるといい。</p> <p>⇒今日のメンバーにも加わっていただきながら続きを推進委員会で検討する。</p>					

テーマ	ひきこもり者・家族への訪問型・伴走型支援のしくみを考える				
リーダー	山崎（さわらび福祉会 「甲賀・湖南ひきこもり支援 - 奏 - 」） 森（彦根市社協）				
進行補助	富田 （野洲市社協）	記録	三宅 （県社協）	参加者数	20名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ひきこもり」という課題を、福祉のできごとから地域のできごとにする（福祉的支援・相談支援のその先を考える） ・福祉路線に乗せることをゴールとしない（Ex. 作業所に繋ぐ等） 					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域（企業）の理解を進めるための学習・啓発の機会の充実が必要。 ・わかりやすい相談窓口（当事者・家族・地域の支援者にとって）が市町単位でない。 ・保健所に相談することの敷居の高さ。 ・相談を受けたその後の出口支援が充実していない（居場所・就労・活躍の場）。 ・支援者を支えるネットワーク体制がない。 ・困難化・長期化する前の早期発見・早期対応が必要。 ・ひきこもりに関しての、地域の情報・実情が知らない、見えづらい。 ・全県的な取り組みにできていない。 ・専門職によるひきこもりになる要因・背景の理解・分析が十分でなかったり、そのことへの理解が広がっていない。 					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・権利擁護サポートセンターとしての伴走型支援をひきこもり支援に活かす。（ノウハウ・支援の構築） ・社会福祉施設や事業所を活用した仕事の間・居場所の提供 ・啓発の機会の充実（地域の理解が、当事者・家族が安心して暮らし続けるためには大前提） ・ひきこもり支援をおこなう関係機関のネットワークづくり ・当事者・家族会のサポート（支援のしくみ化） ・訪問（アウトリーチ）型支援の構築 ・民生委員・児童委員だけではなく、地域の見守りサポーターの養成 					

テーマ	重度障害児・者の生活支援～入浴支援、家族支援を考える				
リーダー	山口（さくらはうす）				
進行補助	荷宮（県社協）	記録	山本（県社協）	参加者数	15名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点</p> <p>① これまでは縁の財源があった。今後、<u>財源</u>がない中で、東近江市・日野町で実際に事業化されたこと（成果）も含めてどのように取り組みを広げていくか。訪問入浴は自宅外では利用できないという制度の壁あり。これからも事業を継続していかないといけない。</p> <p>② 医療的ケアを必要とする人以外にも入浴に関してのニーズは高い。<u>医療的ケアを必要としない人へも</u>取り組みを広げていく必要がある。</p> <p>② <u>家族送迎が負担</u>になり、広がりきらなかった。（モデル事業B: 自宅近隣の高齢者施設で入浴）</p> <p>③ <u>強度行動障害</u>の方の生活支援・家族支援。養護学校や近江学園を卒業後に行くところがない。（県外施設に入所することが多い実情）</p>					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること</p> <p>（1）入浴支援の現状・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・呼吸器をつけて在宅におられる方。成人になってきて自宅のお風呂に入ることが難しくなってきた、なんとか支援していけたらと思うが…。 ・日常で一番困るのは入浴。 ・縁の入浴事業に施設の登録はしているが、実際の利用契約はない。施設を開放して家族で入浴できるような取り組みがすすめば。 ・担当している利用者の中で、養護学校に通っていて将来卒業して福祉サービスを利用する人が増えてくるだろう。日常生活の中で“入浴”は大きな課題。 ・職員、PT、ST、有資格者等の職員体制の課題もある中で、医療的ケアを必要とする障害児の療育、通所バスでの送迎等、どのようにしていくか。 ・放課後等デイでは2、3時間の時間になるが、その中で入浴支援を行っている。入浴は時間もかかるため、療育に十分に時間がかけられない中での事業展開。機械浴があるため、いろんな人たちに来てもらいながら施設開放をしていければと考えている。 ・重度障害児の障害は今後軽くなることはない、支援は継続していくことが必要だという認識を。 ・入浴支援事業で家族の送迎が必要になると、入浴も含めて2時間近く家族の時間が拘束される。 ・（県）昔だったら助からなかった命が助かるようになってきて、医療的ケアの必要な子どもはこれからも増えてくる。停電があった時、医療的ケアの必要な在宅児は非常に困る。 ・家族送迎の負担を考えると、より自宅に近いところで入浴可能にしていきたい。 ・小さなアパートだと、自宅で訪問入浴が入れない。近隣の施設に出向いてもOKというように柔軟に対応できる仕組みにしないと広がっていかない。 ・地域のために使う財源はいくらでも出せる。そんな法人になっていきたい。 ・現在、事業化（制度化）ができて市町の事例を他の市町に広げていく。 					

(2) 強度行動障害の方の受け入れ態勢の現状と課題

- ・人材をどう確保していくか（職員育成、職員の負担軽減）
- ・障害の方への対応ができるヘルパーがいない。現場として、かかわりながらのスキルアップが必要。若手職員がいない。在宅介護スキルをもった訪問事業所を作ることが必要。例えば高齢者の訪問介護事業所が障害者とかかわり、ふれあう機会をつくる等。（交換現場実習のような）
- ・施設の設備が対応できない。夜間の職員体制が難しく受けられないこともある。
- ・ヘルパーのほとんどが50、60歳代。事業所としてではなく、社協としては、ほかのサービス提供事業者とつながっていく機会をつくっていく役割があると考えている。
- ・短期入所であっても、強度行動障害の方を受け入れることは容易ではない。既存の施設では難しい面もある。
- ・強度行動障害の子ども達の支援は学校の中でも大変。自宅ですっと見ているお母さんはさらに大変。何か新しい別のものが必要になるのではないかな。
- ・学校に在籍している間の放課後デイは増えてきている。しかし、強度行動障害の方はなかなか受け入れてもらえない。（ひとつの空間で過ごすことが難しい）
→一番大変な方がどこにいけばよいのだろうという状況。
- ・強度行動障害の方は作業所でも断られる。土日ずっと家にいるのも家族が疲弊するのでどこかに行きたいと思っても行くところがない。
- ・強度行動障害の方が短期入所される際の加算がある。（湖東圏域）
→制度的にはあるが、「人」がいない。受け入れる余力がない施設がほとんど。
- ・今ある資源をどう組み合わせればすすむのか？
- ・地域での生活を継続するための評価を受けるなど、支援が必要。どういう環境をつくっていくかは長い目で考えていかなければならない。

(3) その他

- ・施設が福祉避難所として指定されているが、非常電源等、設備面での課題はある。

3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）

- ・今後、推進委員会のサブ部会をつくる。
- （「重度障害児者の入浴支援事業」と、「強度行動障害の方の生活支援・家族支援」の2テーマで、本日話しきれなかったところからそれぞれ深めていく）

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	⑦児童養護施設等を退所した若者の支援 (Aグループ)				
リーダー	春田 (児童養護施設鹿深の家)				
進行補助	春田 (鹿深の家)	記録	岩本 (県社協)	参加者数	12名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点 (箇条書き)</p> <p>児童養護施設を退所後にいかに社会とつながっていくか。</p>					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること (箇条書き)</p> <p>○縁でつながっていくことが大切。縁の事業をきっかけに企業・事業所の方に社会的養護の子どもたちのことを理解してもらえるようになったのは5年間の成果である。</p> <p>○企業として、児童養護施設を退所した子どもも普通の家庭の子どもも同じと感じている。「あなたがいないと困る」という気持ちが伝わってつながっている。</p> <p>○社協へは退所後すぐの相談はない。退所後生活困窮になった、事件があったなどなんらかのことがあって社協につながっている。居場所はあるけど、つながりがない退所後の支援をするコーディネーターがいるのでは。</p> <p>○子どもが相談にくるのは、緊急でくることが多い。本人が支援してもらうことに遠慮していることが多い。本人が困っているのに主体的に動くことが難しい。支援する側にも遠慮が出てくる。施設側も自分たちでなんとかしないと、という気持ちが強い。</p> <p>○施設職員が目前のことにいっぱいになって先を考えられない。自分の力を子ども本人が信じていない。施設の職員も子どもの力を信じられていなかった。子どもが自信を持っていないのは、社会の目が「施設にいる子はかわいそうな子」という刷り込みが入っているからでは。続いていくモデルが必要。</p> <p>○社協の仕事をもっと知ってもらうことが大切。制度と分野の垣根を超える</p> <p>○たくさんの人とつながっていくことが大切。地域とネットワークがつながっていくことが大切。退所時に市町の関係機関が知らないことが多かったので、入所時に知らせてケース会議を継続している。相談する力を3年間で身に着ける。SOSを伝える力を持っていると生きていける。あなたの周りに応援団がいることを、学園にいる中で実際に会ってつながっていくことで、あなたは一人ではないというメッセージを伝えておく。</p> <p>☆それぞれの分野で頑張っている方が自分たちがなんとかしないといけないという気持ちが強く、“遠慮”して周りとうまくつながれない。任せ側は意外と重く考えていないので。遠慮せず垣根を越えていく必要がある。</p>					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか (箇条書き)</p> <p>☆つながりをもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的養護と障害など分野の横断を実践していきたい。 ・各施設や機関がどんな役割を担っているのか、情報交換できる場が欲しい。 					

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	児童養護施設等を退所した若者の支援（Bグループ）				
リーダー	春田（児童養護施設鹿深の家）				
進行補助	葛城 （大津市社協）	記録	岩本 （県社協）	参加者数	12名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しいつながりを作る子どもたちの苦労とそれに対する手立てを考える。 					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者食堂ができれば救われる若者もいるのではないか。 ・企業として、①ハード面、ソフト面をちゃんとしている企業を増やしていく。②支援者の立場になるのではなく、「知る」というところを共有する ・社会の中で里親を知っている人が少ない。知ってもらうためのフォーラムを開催する。里親を増やすのもあるが、里親を知ってもらい、地域で育てるという思いを持たせたら、子どものためにすぐに行動ができるのではないか。里親を知ってもらう活動をしていけたら。 ・障がいの施設は社会に出るための訓練を積み重ねる。児童養護施設はそこにまで至らないまま、自分の理解（不安など）もできていないまま社会（就職）に出ていく。そこを何とかしないと。 ・働くという意識がない。児童養護地域小規模施設を開設し、食事も自分たちで。出た後にどうして生活を続けていくかを考える。障がいと比べて地域とのつながりが少ない。 ・つながっていくためには工夫が必要とあったが、それ以前の問題なんだなと思った。まずは知ってもらうというアクションが必要。 ・つながりたいときにつながれるスキルを持つことが大切だなと思った。 ・子どもたち自身が困っていると感じて、助けてと言える力をつけていかないといけない。 ・仕事体験の中で細くてもつながりを作り、施設では見せない力を発揮している姿を見せていただいている。子どもたちの成功体験になり、自信にもつながっている。 					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アフターケア事業所が県内に必要。自分のことを深く語らなくてもわかってもらえる場所。相談があってもなくても行ける場所。 ・トラブルシューター制度…相談窓口。必要なところにつなげるしくみができるといい。 ・退所後、施設で育ったことを出したいくない子に地域でどう関わってもらうか。アフターの課題。 ・安全性の高い SNS でのつながり ・対象の年齢の壁を超えるコーディネーター ・医療機関 ・当事者グループ ・司法（弁護士） ・自分の家族をつくるための基礎を身につけられる場 					

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	働きづらさを抱える人の働く場のつくり方を考える				
リーダー	城（社会就労事業振興センター）				
進行補助	松井（グロー）	記録	濱谷（県社協）	参加者数	15名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 障害者手帳のある方は作業所が利用できる。生活困窮の方は、生活困窮者自立支援事業等のサービス利用対象者への支援はすすんでいる。傍楽体験に参加している方、サポステ等利用されている方は、いきなりハローワークに行けない。 ・ 就職までのステップ、次のステップをつくりたい。 					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 長年ひきこもっている方は、実際、雇用に結びつきにくい。 ・ 常に働くことを意識するとしんどい。 ・ ひきこもりの方と話をした。誰かのためになりたいと思っていることわかった。 ・ 一日なら働けるといっている方がいる。 ・ 大卒、20年間職歴なしの方が面接に来た。その時は、職種が合わなかったが、法人として何かできることがあるのではないかと思った。その方にあった働く場をつくる。 ・ 生活困窮者自立支援事業のメニューはいろいろある。制度の狭間の方をどう支援につなぐか。 ・ すぐに仕事につながらない。孤立して生活している方が大半。地域で理解してくれる人を探している。家族もつらい思いしている。家族支援もしている。 ・ 罪を犯した人は就労につながらない、地域にもつながらない。 ・ 障害があるとわかったから生きづらさがなくなった。みんなにわかってもらうことで、配慮してもらえることある。苦手なことも伝える。 ・ 60代、70代で働きたいけど、働く場がない。 ・ 手帳のあるなしに関係なく働く場が実現できたらよい。 					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な地域活動、資源が必要な方に届くようにコーディネート機能を強化。 ・ 社会のなかで、居場所や役割がない、誰からもあてにされないのはしんどい。 ・ しっかりとした雇用でなくてもよいので、仕事を切り出し働ける場があればよい。 ・ これまでの「傍楽」をつないできたサポステのような窓口となる場所（人）がさらに「縁」をつないでいく。 ・ ひきこもりがちな生活をおくる人たちが、時折、誰かから「ありがとう」と言われたり、気かけられるまちづくり。 ・ 働くことを通して、自分らしさをみつけてもらえるために、何かできないか考える。 					

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	住まいの確保が難しい人の支援を考える				
リーダー	澤（さわらび福祉会 「甲賀・湖南ひきこもり支援 - 奏 - 」）				
進行補助	奥村（県社協）	記録	和泉（県社協）	参加者数	11名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際の住まいの課題としては、お金の問題よりも病状が大丈夫なのか、ご近所とトラブルを起こさないか…といった、暮らしの面から保証人がつきにくい（家族からも協力が得られない等）といった問題が多い。 ・家や住まいの確保とともに、どのようなサポートをつけて支援していくのか。 ・不動産会社や住宅を提供される側も不安を抱えており、安心を確保していくためにも、個々のつながりに頼るだけでなく、話し合いを進めて関係性を広げていくことが必要。 					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親との縁も切れていて、保証人が見つからない。保証人協会をお願いするにしても、お金がかかるので、利用できないケースが少なくない。 ・身体障害者の場合、バリアフリーが1人暮らしをするうえでの課題になる。 ・社会からの排除で、住まいの確保ができない面がある。 ・不動産屋の不安の声が大きい。家や住まいを確保する制度やシステムがあっても、なかなか知られていない現状がある。 ・部屋があれば良いわけではなく、貸してほしい人と大家さんとをどのようにマッチングしていくかが大事。 ・不動産屋も、もっとフォローする仕組みがあれば、安心して住まいを提供できる。 ・支援者が知らないことは当事者も当然知らないので、地域での取り組みや工夫を、全県的に情報交換をしていき、もっと広めていくことが大切。このテーマについて、情報を集約していく官民そして民民協働の仕組みが必要。 					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住居確保の成功事例をもっと関係者で共有していきたい。 ・保証人がいない人の入居を大家さんに受け入れてもらえるようなネットワークづくりを、『民民官』で連携しておこなう必要がある。 ※『民民官』…民間（企業）・民間（福祉）・行政 ・県内の関係者でネットワークを築くことにより、個別支援への活用と業界団体または住宅行政への提言をしていきたい。 					

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	在宅介護者（ケアラー）へのケア				
リーダー	小島（守山市社協）				
進行補助	高橋（県社協）	記録	原田（県社協）	参加者数	10名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在宅介護者（ケアラー）の現状とくらしの課題 ・在宅介護者のケアにおいて何が必要なのか ・自分の団体を主体にして他団体とどんなことに取り組んでいくか提案し考えいく 					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <p><介護当事者（家族の声）></p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 民生委員・児童委員が訪問してくれて嬉しかった。→介護者の精神的疲労を緩和させるのは、民生委員・児童委員と地域のチカラが大きい。 ➤ 男性介護者は、男性の特性として男性向けの介護者の集いをして参加する方が少ない。専門職や地域とのつながりがうまく作れないことが多い。 ➤ 身近なところに居場所が増えたらよい。（老々介護においては・・・） ➤ 実父と義父、実母と義母の介護に向き合う気持ちは違う。どう割り切れるか。 ➤ サービス（制度）から説明されると、反論できない。ストレスがたまる。 <p><専門職の声></p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 介護保険ができて本人を支援することがより重視されたが、世帯全体が見えにくくなった。 ➤ デイサービスは、日中のサービスなので、帰宅後の状況が気になる。 ➤ 支援者は、介護者の悩みに対して、悩みは一人ひとり様々なのに、総括的に見てしまう。 ➤ 我慢しなさいというアドバイスはできない。他人として、仕事としてなら違う行動ができる。そこを受け止めてどう話すか。 					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）</p> <p><男性介護者></p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 施設で、男性介護者を対象とした栄養や調理の相談会を開催する。 ➤ 「つどい」の開設地域を増やす。 ➤ 実態を知られていないので、情報を発信する。 <p><老々介護></p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 小さい時から、認知症の方と関わる時間をつくる。（小学校の授業等） <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ ラインを開設して24時間相談を受け付ける（始めている）。夜中の相談が多い。 					

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	介護現場を支えるテクノロジー ～AI&ICTのことを深掘り				
リーダー	本條（ゆいの里）				
進行補助	杉島 （高島市社協）	記録	中本 （グロー）	参加者数	11名
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度厚労省の生産性向上のモデル事業を受託。居宅、訪問介護事業で iPad を導入した。 ⇒便利だと感じ AI&ICT 化を進めていくこととなった。 ・持ち物チェックアプリ、音声入力できるアプリなどを導入している。 ・目的は ICT を活用して生産性・業務改善を利用者の生活や職員の業務を楽にすること。 ・インカムは平成 17 年から導入。デイサービスで利用。特養では特浴介助と看護師間でまずは利用。介護度重度化し、介助は二人体制に。当日リーダーが所持する。 ・新人職員や異動職員に使わせてあげてほしいという声が上がってきている。 ・介護ロボットの助成金で眠りスキャンを看取り対象の方に導入。（マット下に設置。心拍など計測。ベッドから離れると知らせがある。） ・眠りスキャンを導入するにあたり Wi-Fi 環境が必要だったが環境整備のためには助成金はおりにないので、法人の持ち出しで進めていった。 <p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住宅型有料老人ホームを開始。管理者をしておりペーパーレスを進めていた。高齢の方には導入時に反発があったが、「介護のひとつです」と導入した。食事量やバイタルなどデータ管理や洗い出し時の効率化が図れた。iPad のテレビ電話で往診 Dr に外傷などをテレビ電話で部位を診ていただいて通院が必要なのか早期判断できる。 ・介護ソフト「ほのぼの」導入している。入浴、バイタル、食事量を一括管理できているので、他職種との情報共有がしやすくなった。iPad を 10 台ほど導入。写真を撮影して共有できること、記録の入力がどこでもできることが大きな利点だと感じている。不便に感じているが大きなトランシーバーを使用している。専門職と各フロアに渡して活用できていない。 ・監査資料などはペーパーレスでもよいのか。⇒印鑑を押すもの以外はよいと聞いている。 ⇒大阪市は印鑑不要でサインでよいと聞いている。 ・眠りスキャンを導入したい。ほかの場でもお聞きした。 ・かかわりが増えれば記録が増えるので、どうしたものかと考え、iPad 導入。写真で状況を目で見てわかるように共有できることがよいと感じている。まだ導入して日が浅いのでこれからなところがあるが、記録のための残業は減ってきたことが評価できるかなと感じている。インカムは 5、6 年前から導入している。 ・記録システムを導入した。外国籍の職員がいるが、定型文を使うことで記録ができるようになった。眠りスキャンを 10 月 7 日に導入した。記録を読みときながら日々の支援に活かしていきたい。 ・昨年 7 月から介護記録などを電子化。導入当初は職員の中でも抵抗があったりしたが、業務の効率化につながった。記録のため残業している実情があった。定型文などもあり、記録自体スムーズにできるようになった。通所リハビリテーションをしており、毎月居宅に情報提供して 					

いるが、定型文ばかりで内容が薄くなってきている課題あり。

- ・入所前の訪問時に iPad で施設紹介動画を見ていただくことで、入所後のイメージをつかんでいただきやすくなったように感じている。

3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）

- ・導入時には、担当を決めて実践につなげていく。必ず得意な人がいると思うのでそういった方に任せていく。
- ・産業政策課として理工学部の学生さんと福祉現場の課題等（記録や移乗介助や見守りシステムなど）の開発に取り組んでいけたらなと考えている。守山市で開発企業と福祉施設や病院などと共同でされている。すごく大事な機会かなと感じている。
- ・地域医療介護総合確保基金が今年から ICT 機器も対象になったので、もとの介護記録などと連携して使えることなど要件はあるが、県としても来年から対象としていく予定。導入したところの話を聞くなかで、バイタルが細かくとれるようになった、眠りスキャンは看取り時にすぐかけつけられるので職員の精神的負担を軽減することにもつながった、などと聞いている。

テーマ別名刺交換会 記録シート

テーマ	「滋賀の福祉人」定着支援のアイデアを出し合おう				
リーダー	田内（特別養護老人ホームやまでら）				
進行補助	西川（県社協）	記録	藤田（県社協）	参加者数	10人
<p>1. 課題提起されたこと、グループでの意見交換の視点（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員の定着は大きなテーマである ・滋老協でも定着支援が課題。研修・交流会も単発になりがちで中長期的な具体策を講じる必要がある、という話し合いもしている。 ・具体的には専門職がリーダーシップを発揮するための支援。これは高齢分野に限らない。 ・これを法人の垣根を越えて職種ごとでできないか。孤独からわかちあいの場へ。 ・参加者みなさまのお立場で現状や課題をまずは出していただきたい。 					
<p>2. 参加者の気づき、課題と感じていること（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・働いても定着しなければ意味がない。 ・大きな施設であり、研修の体制は整備されている。しかし湖北という地域で人材の“確保”が困難な状況。 ・職員は充足しているが、働きやすさにシフトしすぎるとたちまち不足感が出てくるというところで悩み。余剰人員まで抱えるのは経営的に難しい。 ・専門職の学びたいという思いを支えて定着支援へというのは大切な視点。 ・介護職の人は動機を持って働いている人が多いと感じる。そこも支える。介護職へのリスペクト。 ・「滋賀の福祉人研修」核となる言葉を受講者にしっかりと伝えていきたいと思っている。 ・人材の“確保”が課題。他業界に流れている現状がある。“定着”についてはやりがいとともに、キャリアプランを描けるような提案をすることが大切。 ・働きに見合った処遇も大切。また60代以上の方も働き方も大切。 ・育休など安心してカムバックして働けるように。 ・確保が課題。人材は湖北地域でも取り合いになっている。しかし、待っている人はいる。充足して質を担保したい。 ・入った人が辞めないということが大切。それが確保に向けた武器になるはず。 ・そのための社外でのつながりも重要。 					
<p>3. 現場の課題に対応して、だれと、何を創造実践していきたいか（箇条書き）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動機を持っている人が多い→良い人が多い。しかし、リーダーシップを発揮していこう、というところまでステップアップしようとする人は少ない印象。リーダーシップをもって輝きながら働いている職員の姿が見えれば、若い層が活気づき定着につながる。 ・専門職の醍醐味は対人援助。そこを誇りへ。 ・知識・技術的な習得は研修センター等を活用すればよい。 ・結婚して県外転居すると福祉から離れることが多いため、地方銀行の例のように紹介制度をつくってはどうか。 ・今までトップだけでの話合いになりがちだったが、職員レベルで“私たちの問題”であるという認識にしていきたい。 					

- ・働いている人がみんな「滋賀の福祉人」であることの共通の思いを持って今の仕事を大切にす
る。
- ・リーダー層を育てる研修。例えば、経営、マーケティング。
- ・研修講師に出した職員はとてもモチベーションが上がっている。県下の施設でもそうした認識
が進んでいくとよい。
- ・職員は家族からのクレーム（事故やハラスメント）で悩む。県全体で専門家（弁護士等）に相
談できるような仕組みは大切。→経営協で進行中。
- ・誇りをもって仕事をするロールモデルとなる人や活動（仕事）を見える化できる体制。
- ・事業所を超えた職種チームのつながり
- ・開かれた施設づくり（デイの開放）
- ・小中高への専門職の出前講座＝活躍の場づくり。
- ・指導する人によって言うことの違いないようにマニュアル化。
- ・「見て学べ」でなく、「教えて学ぶ」にする。
- ・滋老協や老健協、そして各施設、事業所…さまざまな人がつながりオール滋賀で進めていくこ
とが大切。